

I 患者情報

1 総括及び全数把握対象疾患

- ・ 一類～五類感染症
- ・ 獣医師が届けを行う感染症

2 定点把握対象疾患

- ・ 週報・月報対象疾患「五類感染症」

3 鹿児島県の風しん予防対策

- ・ 鹿児島県の妊婦における抗体検査の調査事業

1 総括 及び

全数把握対象疾患

- (1) 一類感染症
- (2) 二類感染症
- (3) 三類感染症
- (4) 四類感染症
- (5) 五類感染症
- (6) 獣医師が届けを行う感染症の発生状況

総括及び全数把握対象疾患に関する動向

(2018年1月～12月)

鹿児島県感染症発生動向調査委員会委員長

鹿児島県医師会長

池田 琢哉

【トピックス】

○インフルエンザ 282 万人 最多更新

全国約5千ヶ所の医療機関から1月29日～2月4日に報告されたインフルエンザの患者数が1医療機関当たり54.33人となり、過去最多だった前週(52.35人)を上回り3週連続で最多を更新した。厚生労働省などによると、今年はA型に比べて高熱が出ないこともあるB型インフルが例年より早く流行し、患者数を押し上げているとのことであった。

○梅毒の報告，詳細化へ

性行為などで感染する「梅毒」の流行を受け、厚生労働省は来年(2019年)始めにも患者を診断した医師に報告を求める項目を増やす。追加項目は、性風俗業産業で働いたり利用した経験の有無。経口での性接触による感染を把握するため、口の中の症状、胎児に感染する「先天梅毒」を踏まえ、妊婦か否かも報告してもらう。

○RS ウイルス感染症が，6月に流行する

通常は冬を中心に流行するRSウイルス感染症の流行期がここ数年早まっている。昨年は8月にピークを迎え、例年同時期の5倍という患者数となった。

○風しんの抗体検査，定期予防接種を成人男性無料に(2019年～)

患者数が2千人を超えて流行が続く風しんへの対策を強化するため、特に、抗体保有率が低い昭和37年4月2日～昭和54年4月1日生まれの男性に対し、予防接種法に基づく定期予防接種の対象として、2022年3月までの3年間、市町村が実施主体となり、抗体検査と定期予防接種を実施。

【感染月齢】

1月 ○第2週にインフルエンザの定点当たりの報告数が40.58となり、県内全域にインフルエンザ流行発生警報(基準値:定点当たり報告数30.0)が発令(昨年度は第4週)。

○第3週にインフルエンザの定点当たりの報告数が86.53となり、前週の約2倍に増加、1999年の感染症法施行以来、最も多い報告数となった。

2月 ○第9週にカルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症の届出が3例有。年齢別では、80歳以上が2例、60歳代が1例で、症状別では肺炎が2例、尿路感染が1例。なお、平成29年4月～12月末までに医療機関から提出されたカルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症の菌株は9検体となっている。

3月 ○沖縄県において、海外からの旅行者が麻しんに罹患していることが確認され、滞在先で

の接触者を中心に感染が拡大し、21名まで増加。また、山口県においても海外渡航歴のある麻しん患者が1名公表された。

- 4月** ○愛知県において、沖縄県を旅行し、麻しんを発症した患者からの二次感染が疑われる症例が複数発生。
- 5月** ○沖縄県、愛知県の麻しん報告数は、落ち着いたが、福岡県において17名の感染が確認された。このうち、20代の男性患者が、鹿児島県内に滞在していたことが確認された。
○手足口病の定点当たり報告数が、5週連続増加し、流行発生警報開始基準(5.00)を超えた。全国や県内の過去5年間と比較して、高い状況であった。
○今年1例目のマダニ媒介のウイルス感染症である重症熱性血小板減少症候群(SFTS)の患者が確認された。
- 6月** ○沖縄県において、麻しんの感染者が確認された後、4週間にわたって新たな発生がなかったことを踏まえ、「麻しん(はしか)の終息宣言」が出された。愛知県では新たな発生があり、計25名の患者が確認された。
○上半期における梅毒報告数が18例となり、特に若い世代の女性を中心に増加が認められた。なお、2014年に7例であった報告数が、昨年は21例に増加した。
- 7月** ○手足口病の定点当たり報告数が第20週に警報開始基準値(5.0)を超え、8週連続で流行発生警報域の状況であった。
○RSウイルス感染症の定点当たり報告数が0.93となり、例年よりも早めの増加傾向であった。本県では、春から秋にかけて全国平均より高い水準で推移し、秋頃にピークを迎える傾向となった。
- 8月** ○第32週に日本紅斑熱患者の届出が2例あり、2018年の累計が10例となった。年齢別では、80歳以上4例、60歳～79歳3例、40歳～59歳2例、10歳以下1例であった。
○首都圏において成人を中心とする風しんの報告数が増加。第1週～33週の累積報告数が184人となり、2016年(126人)、2017年(93人)の年間患者報告数を超えた。
- 9月** ○第36週にRSウイルス感染症の定点当たり報告数が5.41(292人)となり、同感染症の報告が開始された2004年以降、はじめて定点当たりの患者数報告数が5.00を超えた。
○2018年1月より、百日咳が定点報告対象疾患から全数報告対象疾患に変更された。第37週の1週間で9例の報告があり、累計で70例となった。
○例年流行期が夏場になるヘルパンギーナが、第34週から増加しはじめ、第39週で定点当たり患者数が2.0を超えた。
- 10月** ○2018年5月から、急性弛緩性麻痺と診断された15歳未満の患者の届出が義務付けられ、第42週で県内初の届出があった。なお、第40週までに全国で51例の患者が報告された。
○第43週に県内で1例目となる風しんの発生届出が、川薩保健所であった。第44週に、県内2例目の届出が出水保健所に出されたが、1例目との因果関係は不明であった。
- 11月** ○11月12日、今シーズン初となるインフルエンザによる集団発生(学年閉鎖)があった。
○第48週に水痘報告数が45人(定点当たり報告数0.83)と増加。水痘は、平成26年から定期接種が始まったことで患者数が減少し、第36週から注意報基準値が4.0から1.0、

警報基準値が7.0から2.0に引き下げられた。

12月 ○第51週にインフルエンザの定点当たり報告数が11.14となり10週連続で増加。流行発生注意基準値10.0を超えたため、12月27日に「インフルエンザ流行注意報」が発令された。

【全数把握対象疾患の概要】

感染症発生動向調査は、全数把握対象85疾患および定点把握対象疾患26疾患について調査を行っている。

○一類感染症の届出はなかった。

○二類感染症の届出は、結核のみであった。届出数は343例で、前年(322例)に比べ21例多い届出であった。病型は、肺結核が166例で最も多く、無症状病原体保有者は105例であった。年齢別では80歳以上が145例で最も多く、60、70歳代がそれぞれ48例、50歳代が36例の順であった。

○三類感染症では、腸管出血性大腸菌感染症が56例で、前年(57例)より1例減少した。月別では6月15例、7月8例、3月が6例の順で、血清型別ではO26が23例で、O157が19例、O111が8例の順であった。年齢別では2歳が10例、0～1歳が7例、30歳～39歳が6例の順に多く、保健所別では鹿児島市が21例で最も多く、徳之島15例、始良5例の順であった。なお、徳之島では、2件の集団発生があった。

○四類感染症では、つつが虫病が89例、日本紅斑熱22例、重症熱性血小板減少症候群(SFTS)9例、レジオネラ症8例、E型肝炎3例、A型肝炎1例であった。つつが虫病は前年(66例)より23例多い89例。都道府県別では前年に引き続き1位であった(2位宮崎県60例、3位千葉県56例)。日本紅斑熱は前年(18例)より4例多い22例。都道府県別では、4位であった(三重県51例、広島県41例、和歌山県32例)。重症熱性血小板減少症候群(SFTS)は、前年(11例)より2例減少し9例(男性4例、女性5例)。年齢別では、80歳以上(3例)、40歳代、60歳代、70歳代(それぞれ2例)の順に多かった。都道府県別では、3位であった(宮崎県12例、広島県10例)。

○五類感染症では、百日咳(155例)、梅毒(51例)、侵襲性肺炎球菌感染症(33例)、急性脳炎(26例)、カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症(25例)、後天性免疫不全症候群、侵襲性インフルエンザ菌感染症、破傷風(それぞれ8例)、アメーバ赤痢(7例)、ウイルス性肝炎(E型・A型を除く)(5例)、急性弛緩性麻痺、クロイツフェルト・ヤコブ病、劇症型溶血性レンサ球菌感染症、水痘(入院例)、風しん(それぞれ3例)、クリプトスポリジウム症、侵襲性髄膜炎菌感染症(それぞれ2例)、播種性クリプトコックス症、薬剤耐性アシネトバクター感染症(それぞれ1例)の届出があった。

本感染症発生動向事業定点医療機関、並びに全数把握対象疾患のご報告をいただいた医療機関に感謝申し上げますとともに、今後も感染症の早期発見と早期治療に努めることで、地域への感染症防止に尽力していきたい。

(1) 一類感染症の発生状況

発生報告なし

(2) 二類感染症の発生状況

平成30年の県内における二類感染症の届出は、結核が343例(男性148例, 女性195例)で, 平成29年の322例に比べ, 21例多い届出であった(表1-1-1, 表1-1-2, 図1-1)。病型では, 肺結核(166例), 無症状病原体保有者(105例), その他(72例)で, 年齢別では, 80歳以上(144例), 60歳代(49例), 70歳代(48例)の順に多い届出数であった。

表1-1-1 月別発生状況

月	報告数	無症状病原体保有者(再掲)
1	32	10
2	18	4
3	34	9
4	34	11
5	31	6
6	25	9
7	28	13
8	34	6
9	26	9
10	19	6
11	33	13
12	29	9
合計	343	105

表1-1-2 保健所別届出状況

保健所名	報告数	無症状病原体保有者(再掲)
鹿児島市	166	57
指宿	6	3
加世田	12	0
伊集院	4	3
川薩	23	7
出水	10	1
大口	13	7
始良	35	11
志布志	7	3
鹿屋	29	4
西之表	4	0
屋久島	3	0
名瀬	20	4
徳之島	11	5
合計	343	105

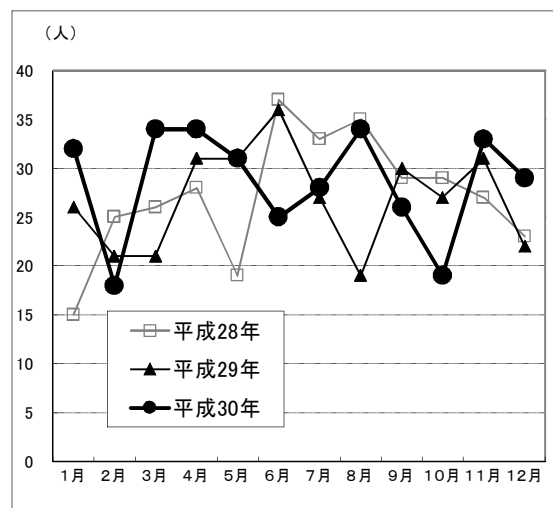


図1-1 平成28～30年の結核発生状況

(3) 三類感染症の発生状況

平成30年の県内における三類感染症の発生状況は, 腸管出血性大腸菌感染症56例(図1-2-1, 図1-2-2, 図1-2-3, 図1-2-4, 表1-2-1, 表1-2-2, 表1-2-3)であった。

○腸管出血性大腸菌感染症

県内における腸管出血性大腸菌感染症の届出状況は, 前年(57例)より1例少ない56例(患者37例, 無症状病原体保有者19例)であった。月別では6月(15例), 7月(8例), 3月(6例)の順に(図1-2-1, 図1-2-3), 血清型別では026(23例), 0157(19例), 0111(8例)の順に多かった。(図1-2-2, 図1-2-4, 表1-2-1)。年齢別では, 2歳(10例), 0～1歳(7例), 30～39歳(6例)の順に多く(表1-2-2), 保健所別では, 鹿児島市(21例), 徳之島(15例), 始良(5例)からの報告が多かった(表1-2-3)。徳之島保健所管内では2件の集団発生があった。

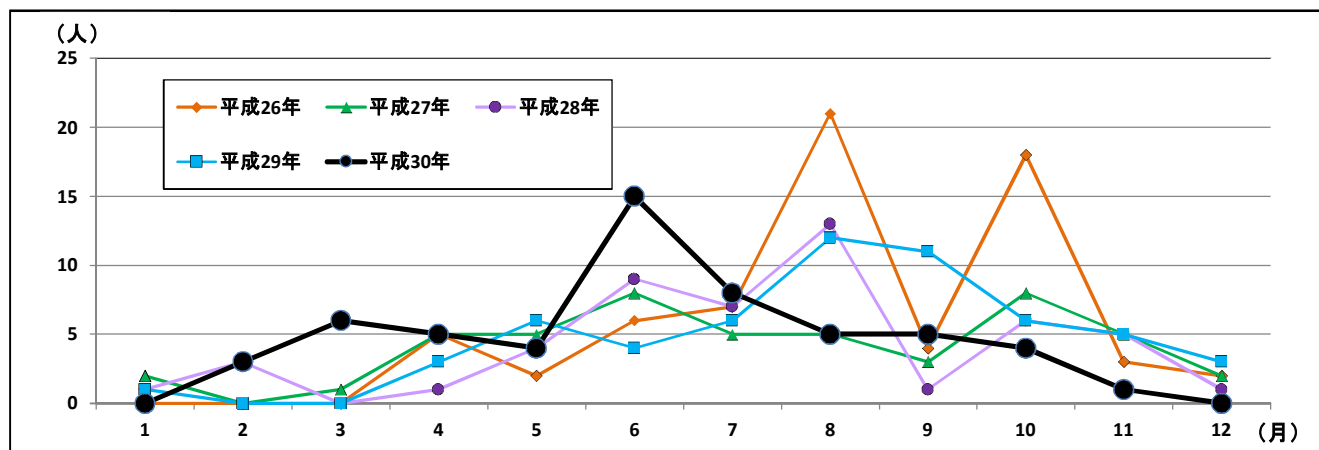


図1-2-1 腸管出血性大腸菌感染症の年別月別患者発生数

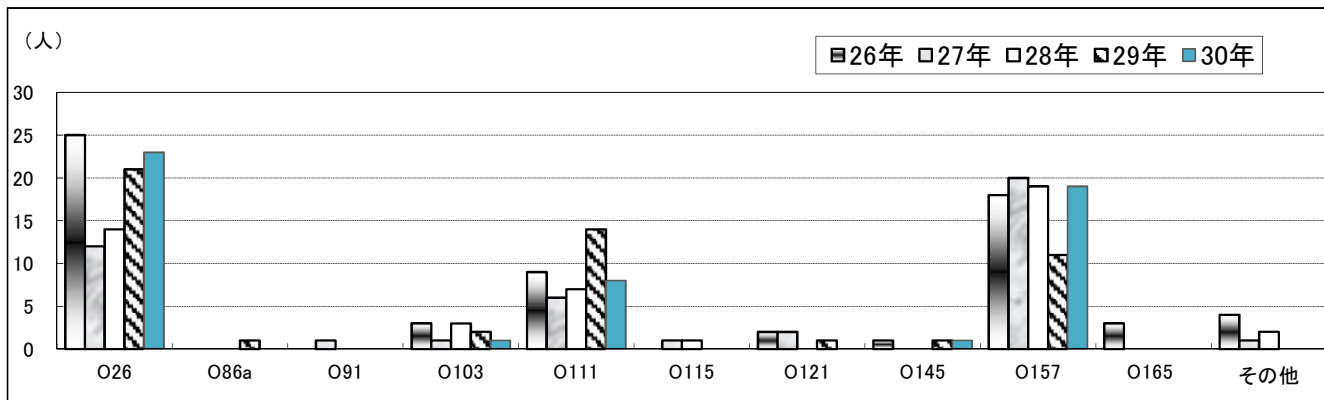


図1-2-2 腸管出血性大腸菌感染症の血清型別

表1-2-1 腸管出血性大腸菌感染症の年別血清型

年	型別	O26	O86a	O91	O103	O111	O115	O121	O145	O157	O165	その他	不明	合計
平成21年		17	0	2	3	4	2	1	1	41	0	1	0	72
平成22年		13	0	1	3	13	0	8	0	26	1	2	0	67
平成23年		49	0	1	9	3	0	0	4	32	0	2	1	101
平成24年		12	0	2	2	61	0	2	1	30	1	4	2	117
平成25年		14	0	0	6	5	1	3	0	25	0	8	3	65
平成26年		25	0	0	3	9	0	2	1	18	3	4	3	68
平成27年		12	0	0	1	6	1	2	0	20	0	2	5	49
平成28年		14	0	0	3	7	1	0	0	19	0	2	5	51
平成29年		21	1	0	2	14	0	1	1	11	0	0	6	57
平成30年		23	0	0	1	8	0	0	1	19	0	0	4	56
合計		200	1	6	33	130	5	19	9	241	5	25	29	703

表1-2-2 平成30年における腸管出血性大腸菌感染症の性別及び年齢別報告数

年齢別	性別	～1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10～14歳	15～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～69歳	70歳以上	合計
男		2	3	3	1	1	1	0	1	1	2	1	1	1	0	1	0	2	21
女		5	7	1	1	2	2	0	0	1	1	1	2	5	1	4	1	1	35
合計		7	10	4	2	3	3	0	1	2	3	2	3	6	1	5	1	3	56

表1-2-3 平成30年における腸管出血性大腸菌感染症の保健所別報告数

保健所	鹿児島市	指宿	加世田	伊集院	川薩	出水	大口	始良	志布志	鹿屋	西之表	屋久島	名瀬	徳之島	合計
報告数	21	2	4	1	3	2	0	5	2	0	1	0	0	15	56

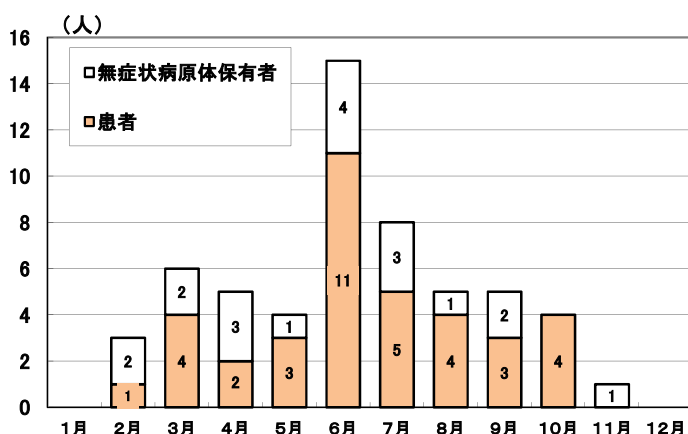


図1-2-3 平成30年における腸管出血性大腸菌感染症の月別・病型別報告数

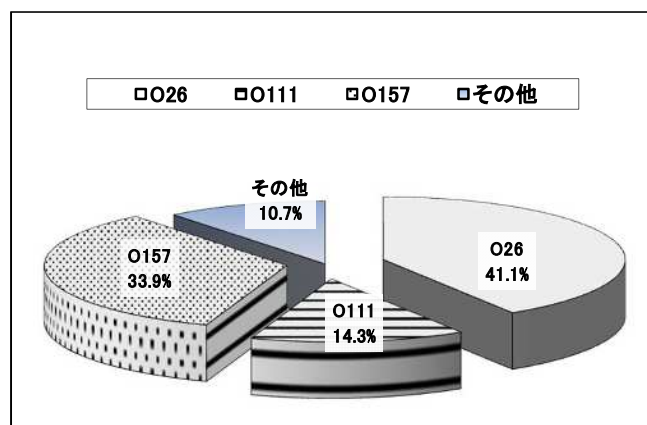


図1-2-4 平成30年における腸管出血性大腸菌感染症の血清型別割合

(4) 四類感染症の発生状況

平成30年の県内における四類感染症は、つつが虫病(89例)、日本紅斑熱(22例)、重症熱性血小板減少症候群(9例)、レジオネラ症(8例)、E型肝炎(3例)、A型肝炎(1例)であった(表1-3)。つつが虫病及び日本紅斑熱の年次別報告数推移を図1-3に示した。

表1-3 四類感染症の発生状況

疾患名		年										
		21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	
四類 感 染 症	つつが虫病	59	53	73	48	38	41	67	77	66	89	
	日本紅斑熱	9	11	9	17	14	14	11	22	18	22	
	重症熱性血小板減少症候群(SFTS)					5	4	6	4	11	9	
	レジオネラ症	6	7	7	5	3	11	4	19	7	8	
	E型肝炎	1	0	0	0	0	1	0	1	0	3	
	A型肝炎	1	13	4	2	1	34	1	1	1	1	
	レプトスピラ症	2	0	1	3	3	0	1	5	1	0	
	デング熱	0	0	1	1	5	0	1	2	0	0	
	ライム病	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	
	マラリア	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	
合計		78	84	95	76	69	105	91	131	104	132	

○つつが虫病

県内におけるつつが虫病の発生状況は、前年(66例)より23例多い89例であった。都道府県別の報告数(456例)では、前年に引き続き全国第1位であった(2位宮崎県60例、3位千葉県56例)。性別では、男性が50例、女性が39例で、月別では、12月(41例)、11月(31例)、1月(12例)の順に多かった。年齢別では、60歳代(27例)、70歳代(26例)、80歳以上(22例)の順に多く、届出受理保健所別では、鹿屋(27例)、志布志(17例)、始良(16例)の順であった。

○日本紅斑熱

県内における日本紅斑熱の発生状況は、前年(18例)より4例多い22例であった。都道府県別の報告数(305例)では、三重県(51例)、広島県(41例)、和歌山県(32例)の順に多く、鹿児島県は第4位であった。性別では、男性が8例、女性が14例で、月別では、10月(6例)、5月(5例)、8月(3例)の順に多かった。年齢別では、80歳以上(8例)、60歳代(7例)、50歳代、70歳代(それぞれ2例)の順に多く、届出受理保健所別では、鹿屋(16例)、名瀬(2例)、鹿児島市、出水、始良、志布志(それぞれ1例)の順であった。

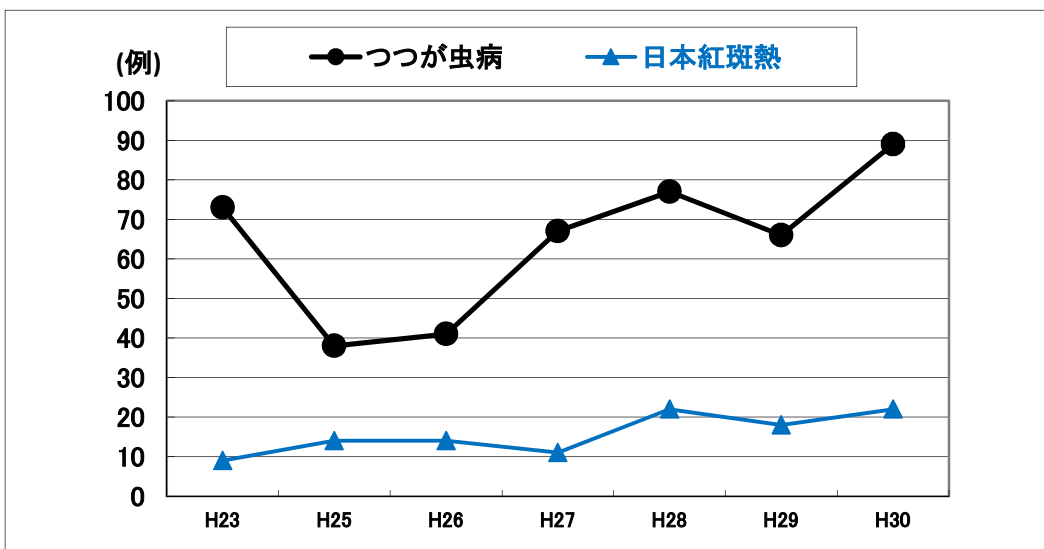


図1-3 つつが虫病及び日本紅斑熱の年別発生状況

○重症熱性血小板減少症候群(SFTS)

県内における届出状況は、前年(11例)より2例少ない9例(男性4例, 女性5例)であった。月別では、5月(4例), 8月(3例), 6月, 7月(それぞれ1例)であった。年齢別では、80歳以上(3例), 40歳代, 60歳代, 70歳代(それぞれ2例)の順に多かった。全国では、77例の報告があり、宮崎県(12例), 広島県(10例), 鹿児島県(9例)の順に多かった。

○レジオネラ症

県内における届出状況は、前年(7例)より1例多い8例(男性7例, 女性1例)であった。病型別では、全てが肺炎型であった。月別では、3月, 4月(それぞれ2例), 2月, 7月, 9月, 10月(それぞれ1例)であった。年齢別では、60歳代, 80歳代以上(それぞれ3例), 50歳代, 70歳代(それぞれ1例)の順に多かった。届出受理保健所別では、鹿児島市(4例), 志布志, 鹿屋, 出水, 徳之島(それぞれ1例)であった。感染経路は水系感染が4例, その他・不明が4例であった。

○E型肝炎

県内における届出状況は、3例(男性2例, 女性1例)で、いずれも50歳代であった。届出受理保健所別では、鹿児島市, 川薩, 名瀬から1例ずつの報告であった。3例とも血清IgA抗体の検出により診断されている。感染原因については、2例は経口感染(豚肉, 生レバー(肉種不明))で、1例は不明であった。

○A型肝炎

県内における届出は、昨年と同じく1例(85歳女性)であった。全身倦怠感, 肝機能異常があり, 血清 I g M抗体の検出により診断されている。

(5) 五類感染症の発生状況

平成30年の県内における五類感染症の報告は347例で、百日咳(155例)、梅毒(51例)、侵襲性肺炎球菌感染症(33例)、急性脳炎(26例)、カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症(25例)、後天性免疫不全症候群、侵襲性インフルエンザ菌感染症、破傷風(それぞれ8例)、アメーバ赤痢(7例)、ウイルス性肝炎(E型・A型を除く)(5例)、急性弛緩性麻痺、クロイツフェルト・ヤコブ病、劇症型溶血性レンサ球菌感染症、水痘(入院例)、風しん(それぞれ3例)、クリプトスポリジウム症、侵襲性髄膜炎菌感染症(それぞれ2例)、播種性クリプトコックス症、薬剤耐性アシネトバクター感染症(それぞれ1例)の届出があった(表1-ハ)

表1-4 五類感染症の発生状況 (報告数順)

疾患名	年										
	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	
百日咳											155
梅毒	5	7	25	6	7	7	10	18	21	51	
侵襲性肺炎球菌感染症					12	24	25	17	24	33	
急性脳炎	11	11	4	8	0	7	11	17	21	26	
カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症						1	13	15	10	25	
後天性免疫不全症候群	10	13	13	8	12	12	9	11	18	8	
侵襲性インフルエンザ菌感染症					1	4	0	2	1	8	
破傷風	10	5	5	4	4	6	5	4	5	8	
アメーバ赤痢	2	8	2	7	5	6	7	7	7	7	
ウイルス性肝炎(E型・A型を除く)	0	1	1	2	5	8	4	6	4	5	
急性弛緩性麻痺										3	
クロイツフェルト・ヤコブ病	1	5	3	3	4	4	10	4	6	3	
劇症型溶血性レンサ球菌感染症	0	0	0	3	2	1	6	3	3	3	
水痘(入院例に限る)						4	4	3	5	3	
風しん	0	2	2	4	386	0	0	1	0	3	
クリプトスポリジウム症	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	
侵襲性髄膜炎菌感染症					0	0	0	1	1	2	
播種性クリプトコックス症					0	0	1	1	5	1	
薬剤耐性アシネトバクター感染症	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	
バンコマイシン耐性腸球菌感染症	0	3	1	1	0	0	1	1	0	0	
ジアルジア症	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	
麻しん	7	4	3	1	0	5	0	0	0	0	
合計	46	59	59	48	438	89	107	112	133	347	

○百日咳

百日咳は、平成30年から全数把握対象疾患(それまでは小児科定点把握対象疾患)となったことで全年齢層の患者が報告されるようになり、155例の報告があった。年齢別では、0～9歳(57例)、10歳代(48例)、40歳代(19例)の順に多く、届出受理保健所別では、鹿児島市(111例)、川薩(19例)、大口(10例)の順であった。

○梅毒

県内における届出状況は、前年(21例)より30例多い51例(男性34例、女性17例)であった。病型別では、早期顕症Ⅰ期(20例)、早期顕症Ⅱ期(17例)、無症状病原体保有者(12例)、晩期顕症梅毒(1例)の順に、年齢別では20歳代(21例)、40歳代(12例)、30歳代(10例)、50歳代(4例)、0～9歳、10～19歳、60歳代、70歳代(それぞれ1例)の順に多く、届出受理保健所としては、鹿児島市(38例)、始良(7例)、川薩(3例)、加世田、志布志、徳之島(それぞれ1例)の順であった。

○侵襲性肺炎球菌感染症

県内における届出状況は、前年(24例)より9例多い33例(男性19例、女性14例)であった。年齢別では70歳以上(13例)、0～9歳(8例)、60歳代(8例)、50歳代(2例)、30歳、40歳代(それぞれ1例)の順に多く、届出受理保健所としては、鹿児島市(15例)、鹿屋(9例)、徳之島、志布志(それぞれ4例)、名瀬(1例)の順であった。

○急性脳炎

県内における届出状況は、前年(21例)より5例多い26例(男性13例, 女性13例), 年齢別では, 9歳以下(16例), 20歳代(4例), 10歳代, 30歳代(それぞれ2例), 60歳代, 70歳以上(それぞれ1例)の順に多く, 届出受理保健所別では, 鹿児島市(24例), 始良(1例), 川薩(1例)の順であった。

○カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症

県内における届出状況は、前年(10例)より15例多い25例で, 性別では, 男性(19例), 女性(6例)であった。年齢別では, 70歳以上(16例), 60歳代(5例), 50歳代(2例), 30歳代(1例), 9歳以下(1例)の順に多く, 届出受理保健所別では, 鹿児島市(17例), 鹿屋(4例), 川薩(2例), 伊集院, 大口(それぞれ1例)であった。

○後天性免疫不全症候群

県内における届出状況は、前年(18例)より10例少ない8例で, 病型別では無症状病原体保有者が6例, 患者が2例であった。性別は8例とも男性で, 年齢別では, 30歳代(4例), 20歳代(2例), 40歳, 50歳代(それぞれ1例)の順に多く, 届出受理保健所としては, 鹿児島市(7例), 出水(1例)の順であった。

○侵襲性インフルエンザ菌感染症

県内における届出状況は、前年(1例)より7例多い8例(男性7例, 女性1例)であった。年齢別では, 70歳以上(3例), 30歳代, 60歳代(それぞれ2例), 9歳以下(1例)の順に, 届出受理保健所別では, 鹿児島市(5例), 鹿屋, 西之表, 徳之島(それぞれ1例)であった。

○破傷風

県内における届出状況は、前年(5例)より3例多い8例(男性2例, 女性6例)で, 年齢別では, 70歳代(3例), 80歳代(5例)であった。届出受理保健所別では, 鹿児島市(4例), 始良, 鹿屋, 名瀬, 徳之島(それぞれ1例)であった。

○急性弛緩性麻痺

急性弛緩性麻痺は, 同様の症状を呈するポリオでないことを確認するために, 平成30年5月1日から五類感染症全数把握対象疾患に追加された。県内では5月以降に3例(3歳, 6歳, 8歳)の届出があり, 行政検査の結果, いずれもポリオでないことが確認されている。

○風しん

県内では3例の届出があった。いずれも検査診断例(抗体検査, 遺伝子検査)で, 性別では3人とも男性, 年齢別では, 30歳代(1例), 40歳代(2例)であった。届出受理保健所別では, 出水(2例), 川薩(1例)であった。

(6) 獣医師が届けを行う感染症の発生状況

県内において獣医師が届けを行う感染症の報告例はなかった。